

## 今井 由紀

IMAI, Yuki

### キャラクターと身体性

Character and physicality



**BODY**  
油彩、アクリル、パステル / キャンバス  
Oil, acrylic and pastel on canvas  
116.7 × 91 cm / 3点 (3 pieces)



**Rule of image**  
スプレー / ポリ塩化ビニール  
Spray on PVC (polyvinyl chloride)  
210 × 155 × 65 cm

3点の絵画はそれぞれ1年時から1年間モチーフとして使用したエアードールの「姫川愛里」を描写したものだ。始めはそれ自体が持つ存在感や見た目の強さに惹かれたが、モチーフとして1年間向き合っているうちに、人間の代替として機能するために人型という形を取らざるを得ない商品としての一面に悲哀を感じるだけでなく、何とも言えない生々しさを感じるようになり、一種の親しみやすさすら覚えるようになった。目、鼻、口という外見が与える影響のせい

か実際に置いてあるだけで、次第に周りに馴染んでいくような妙な感覚があった。確かに彼女は「場」を変える力を持っていた。そこから存在の生々しさとして、人間の皮膚を想起させる「肉」の描写と、それでも実際にはポリエチレン製の空の容器であり、そこには始めからなにもないのだという「空虚さ」を、物質として確かにそこには存在するエアードールを通して私は同時に表現したかった。

## 大橋 麻里子

OHASHI, Mariko

### 絵画を探る

Seeking painting



母なるもの / Mother

油彩、アクリル、クレパス、シルクスクリーン / キャンバス / Oil, acrylic, pastel crayon and silkscreen on canvas / 194 × 162 cm

抽象絵画に対するリスペクトと自分自身の理想を、森という場所を舞台に描いています。

森は、人間にとって母のような存在だと考えます。原初的で、崇高なもののように思えます。また、自分にとって特別な場所のような気がするのです。

多くの抽象画家が残してきた痕跡を拾い集めるかのように、線や面といった、絵画をつくるための要素ひとつひとつに着目し、制作をしています。絵画表現における抽象の立

ち位置や在り方を見つめなおし、その可能性を広げられるような作品を描きたいと考えます。

黄色やピンクなどの明るい色は、私自身の憧れの色です。鮮やかで、派手派手しく視界に飛び込んでくる。私にはないものを、絵はたくさん持っています。すべての作品は、私の感情や理想が詰め込まれた自画像のようなものなのです。

具体的な物質の表現について考えています。作品はこれからもっと抽象化していくような気がしています。



森—全体性における考察—

Forest—Consideration of totality—

油彩、アクリル、クレパス、シルクスクリーン / キャンバス

Oil, acrylic, pastel crayon and silkscreen on canvas

162 × 227 cm

## 岡田 菜美

OKADA, Nami

### 無意識と記憶

The unconscious and memory



何かを考えながら彼女を見ていた  
I was looking at her while thinking about something else  
アクリル / キャンバス  
Acrylic on canvas  
130 × 162 × 4 cm

記憶や心象風景は、視覚や聴覚などのさまざまな作用無しにはイメージできない。これは、赤子が、本能のみの状態から外からの刺激を吸収することにより自己を確立していくように、ひとつのイメージとして独立しているかのようにも思える記憶や心象風景というようなもの自体も、外から受けるイメージの蓄積により成り立っていると考えられる。それらは自分が認識している範囲外でも蓄積し、あるときに突然意識の中に飛び出してくることがある。このように、今イメー

ジできているものは、表面に現れた、無意識の上に成り立つ意識のごく一部分なのである。

以上のことから、我々の意識の中には見えるイメージと無意識に潜む見えないイメージという二面性があると考えられ、更にそのふたつの関係は常に移り変わり続けるのである。制作では、それらの関係性について研究をして、この意識と無意識というふたつのイメージの一瞬を切り取って表現している。



思い出の寄せあつめ  
Collected memories  
アクリル / キャンバス  
Acrylic on canvas  
181 × 227 × 4 cm

# 北川 香乃花

KITAGAWA, Konoka

## 女の振る舞い

Women's Behavior



Acts  
油彩 / キャンバス  
Oil on canvas  
194 × 391 cm

私は今まで自画像を描いているうちに、次第に興味の対象が自分から他人に気に入られようと自分を偽って振る舞う女、自分大好きな気持ちがにじみ出るほどの自己愛に満ちた女に変わっていった。ぶりっ子の可愛いと思われるために振りまく過剰な笑顔やしぐさ、鏡の中の自分に向かって微笑む自惚れ屋の姿を目の当たりにした時には、何とも言えない気持ちになる。目を背けたくなるような存在だが、あえてそこにスポットを当て皮肉を込めて絵にするのは興味深いの

ではないかと思い、制作している。

一見すると模様で埋められたカラフルな画面に、ふわふわの髪で可愛らしくポーズをとる女の子を描いた絵。しかしよく見ると顔面などに描き込まれた模様が少し不気味に思えてくる。そこで女達の異様な態度に気付かされ、もやもやした気分になったり苦笑いしたりする。もしかすると、そのような滑稽で不快な存在に自分もなっているかもしれない。



Vanity  
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 162 × 130 cm

## 來山 侑加

KITAYAMA, Yuka

### リアルを表現すること

Representing the real

私が描きたいのは、私にとってのリアルな世界である。

日々生活している中で感じた現実的な記憶や印象の中から、私には言語化することが難しいものごとを、絵に描いて表現したいと思っている。目に見えたものや感じたことを素直にそのまま描くことが、私の表現の形なのである。

鉛筆での細密表現も、絵の具での大胆なストロークも、表現の方法は全く違っているが、どちらも私の目に見えてい

るありのままの世界である。

世界にはたくさんの魅力的な色や形が存在していて、それらが私たちの生活を彩っている。

私はその中で、自然が生み出す形や、複雑な形態や歪みを持つものに魅力を感じる。これらを線や色で平面上に描き、観る人に視覚的、感覚的に訴えかけることが、今、私にとって最も興味あることである。



World look in my eyes

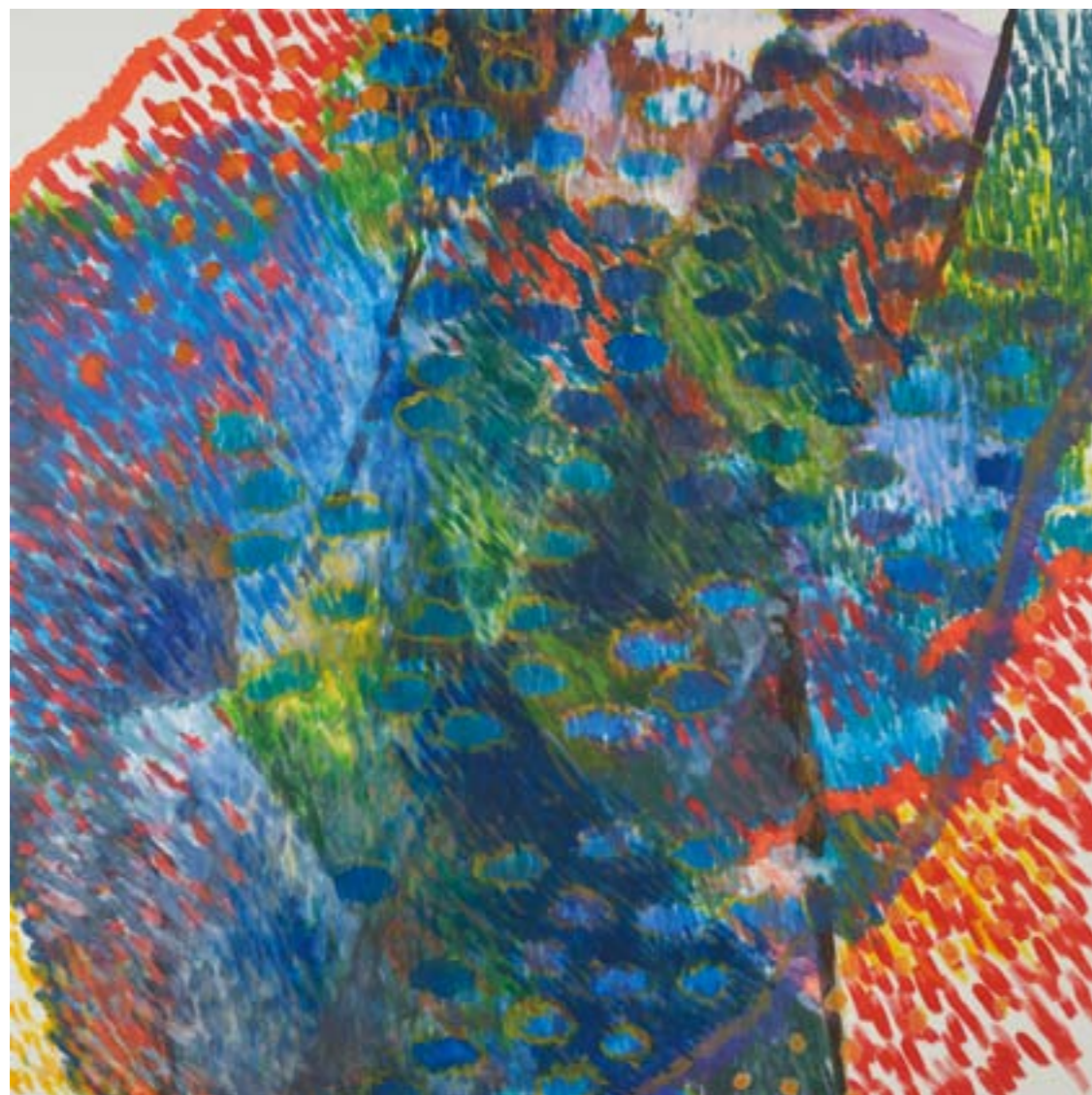
油彩、アクリル、パステル、インク、鉛筆、色鉛筆、スプレー / キャンバス  
Oil, acrylic paint, pastel, ink, pencil, colored pencil and spray on panel  
サイズ可変 / Variable size

## 君島 李佳

KIMISHIMA, Rika

### 感動を探ること

Looking for an impression



私は、具体的なものの形を描かず、抽象的な形を用いた絵画の制作を行ってきました。具体的なものではない形は、ものという情報によって想像やイメージを膨らませるのではなく、形として画面上に存在する事の意味合いや役割を持っています。それは色に関しても同様で、私の絵に対する興味はその追求にあり、またそこに絵画空間の表現を見出しています。それらの要素は画面上で互いを引き立て合い、それ単独では見る事の出来ない見え方で画面上に現れます。その見え方は偶然現れたものではなく、私自身の意思によ

て色を選び、形を決め、描いたものです。しかし自分の意思を持って画面と向き合っても、色や形は私の想像を超えることがあります。それは絵画のイリュージョンによるもので、私が表現する事の出来る絵画空間の新しい一面をそこに発見する事が出来るのは、絵画制作の楽しみの一つです。そしてなによりも、新しい表現を見つける事、それを描く事、そしてそれを見る事は私と私の作品との間に流れる感動のやりとりであり、新しい感動を知る事の出来るプロセスであり、だから描く事を続けているのだと思います。



右  
Composition of yellow  
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 227.3 × 181.8 cm

左  
松の木からの構図 / Composition of pine tree  
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 62 × 162 cm

## 黒澤 優

KUROSAWA, Yu

### 意識と無意識について

On consciousness and unconsciousness

私は大学院で過ごした二年間、「意識と無意識」をテーマに、絵画を制作して来ました。学部時代は、コンセプトに重きを置いて作品を制作していましたが、大学院では、自分の意図や意志を超え、偶然出来る絵の具の物質的な表情や、複雑な色合いに興味を持ち、制作スタイルを変えました。制作を続けていく中で、自分の中では何も考えず (= 無意識に)、絵の具を選び、キャンバスに描いていたつもりでも、枚数を重ね、冷静に自分の作品を見てみると、やは

りどこか似ており、自分の意識を超えたところで、似た色や表現方法を自分自身が選択していることに気がつき、「自分自身の中にある無意識の中にある意識や意図がいったいどのようなものなのか」、また、「一つの作品を制作するにあたって、どのくらいの割合で意識的な要素と無意識的な要素があるのか」といったような問いを自身に投げかけ、「意識と無意識」をテーマに、絵画の制作を行って来ました。



Real and virtual I

油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 116.7 × 116.7 cm

## 小林 奈央実

KOBAYASHI, Naomi

### Imaginary friend

心の中の不思議な対話

Wonderful dialogue of mind



My imaginary friends  
映像 / プロジェクション、パネル  
Projection on panel  
1分4秒

「想像上の友達 (Imaginary friend)」と呼ばれる現象がある。実在しない、空想の友達を作り出し、あたかも存在するかのように遊んだり、一緒にしゃべったりする、しばしば幼い子どもの時期に見られる現象である。想像上の友達は人や動物、ぬいぐるみ、幽霊のような気配、不気味な化物、異星人、妖精など、そのイメージは多岐にわたる。心理学、発達心理学の領域で主に研究されてきたが、文学、映像作品に多く登場することからも、美術の領域においても探求す

るにたる興味深いモチーフであると私は考える。

彼らの存在は、人が現実にもみ生きている訳ではなく、想像の中でも多くの時間を生きていることを示唆している。想像力は未来の可能性を生み出し、現実に向かう力になる。私自身の心の内にも想像上の友人達が息づいている。想像力の化身である彼らと共に私はこれまでの困難を乗り越えてきた。私はImaginary friendを生涯のテーマの一つとして、大切に続けたいと考えている。



ミノの宇宙  
Microcosm of Mino  
映像 / プロジェクション  
Projection on wall  
2分4秒



## 鈴木 亮平

SUZUKI, Ryohei

### フェティッシュの具現

Embodiment of Fetish

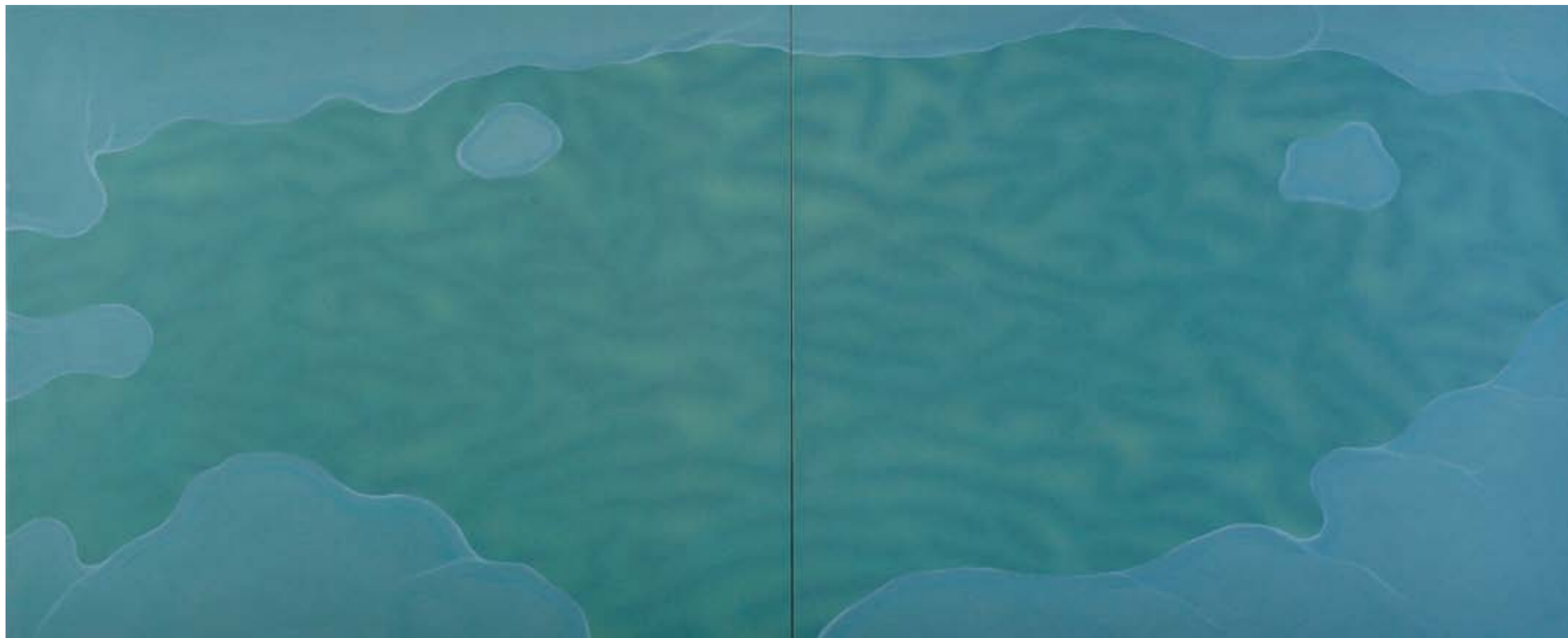
油絵具の特質である、深い色味や重厚な質感、透明性に艶…これを生かすための最適な描画方法を選択し、丁寧に絵肌を作り上げることによって、自分でずっと見ても飽きない作品となれば物質的な側面での試みは成功したと言えます。

更に、それらの要素とモチーフの形態との関係性が視覚的な効果を生み出すことを期待しています。

たとえ鑑賞者が何が描かれているのか分からず終いで、

作品を到底理解出来なかったとしてもそれは大した問題ではありません。重要なのは、「何かしらのものが描かれている」と認知することです。

そこから絵肌に目を向け、作品を解釈しようとする事で初めて、私が美しい絵肌に仕上げようとしていただけの絵具の層に、何らかのイメージが付与され、単なる物質性を越えた絵画作品としての広がりを持つのだと考えています。



景観 1512.01  
Landscape 1512.01  
油彩 / キャンバス  
Oil on canvas  
130.3 × 324 cm

## 関谷 はつみ

SEKIYA, Hatsumi

### あいまいな絵画

Ambiguous painting



Hollowness painting  
ミクストメディア  
Mixed media  
サイズ可変 / Variable size

私にとっての「絵画」とは何か。未だ見つけることが出来ていない。もはや、絵画であるかそうでないかは重要ではないのかもしれない。「絵画」とも「その他のもの」とも受け取れる両義性を持つ中立な作品を作りたい。

作品のモチーフは、看板、ポスター、標識、文字など記

号的要素を持つ。この要素は表層のものでしかない。派生された記号の展開は、複製の複製を繰り返す意味も要素も薄れていく。物体としての絵画を取り巻く表層の画面は薄く、透明なものであって良いと考える。



左	右
Untitled	Notes / painting
ミクストメディア	ミクストメディア
Mixed media	Mixed media
80 × 65 cm	180 × 180 cm

# 田中 明日香

TANAKA, Asca

## 風景の知覚と表現

Perception and representation of landscape



駅裏  
The landscape behind the station  
油彩 / キャンバス  
Oil on canvas  
181.8 × 227.3 cm

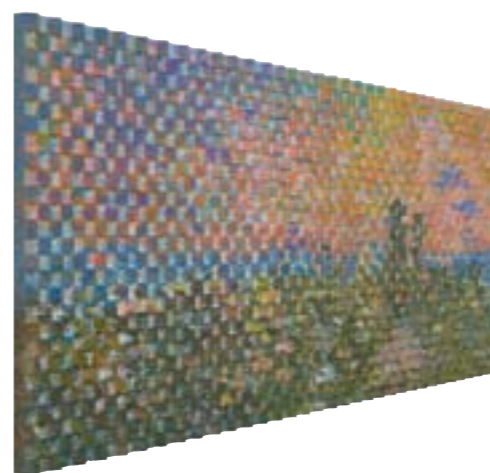
私は「風景とは出来事である」と考えている。風景とは空間的な広がりであり、また時間的な広がりでもある。そして、私達もその壮大な風景の一部だ。従って、風景と人は切っても切り離せない。現代において、人は風景を知覚し、創造し、さらにはその一部となる。風景は周りを取り巻く環境であると同時に、個人、あるいは集団としての人々が、歩んできた歴史を投影したものであるとも言える。それをある支持体に定着させ、ある意図を持って表現されたものが風景

画であると思う。

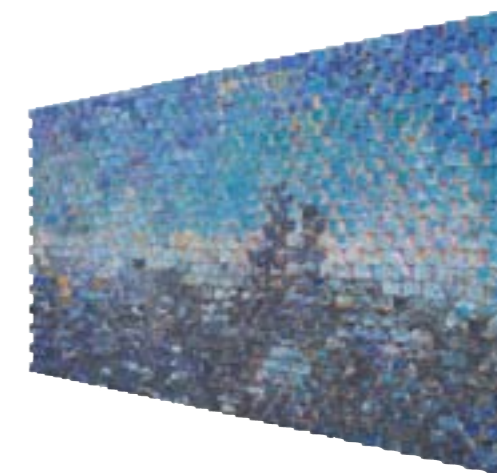
私が取り組む制作は、家主を失った家が解体された跡地から始まり、モチーフを変えながらも、結局は風景というところに執着したものである。そこには目に見える情報だけでなく、土地の記憶ともいべき歴史が横たわっているのだ。私はそこに風景の奥深さと魅力を感じている。その有り様を見つめ、作品として表現することで、風景への私なりのアプローチを模索していきたい。



作品中央 / Front view



左側 / Left view



右側 / Right view

In the town  
油彩 / キャンバス  
Oil on canvas  
65.2 × 182 cm

## 田中 悠紀

TANAKA, Yuki

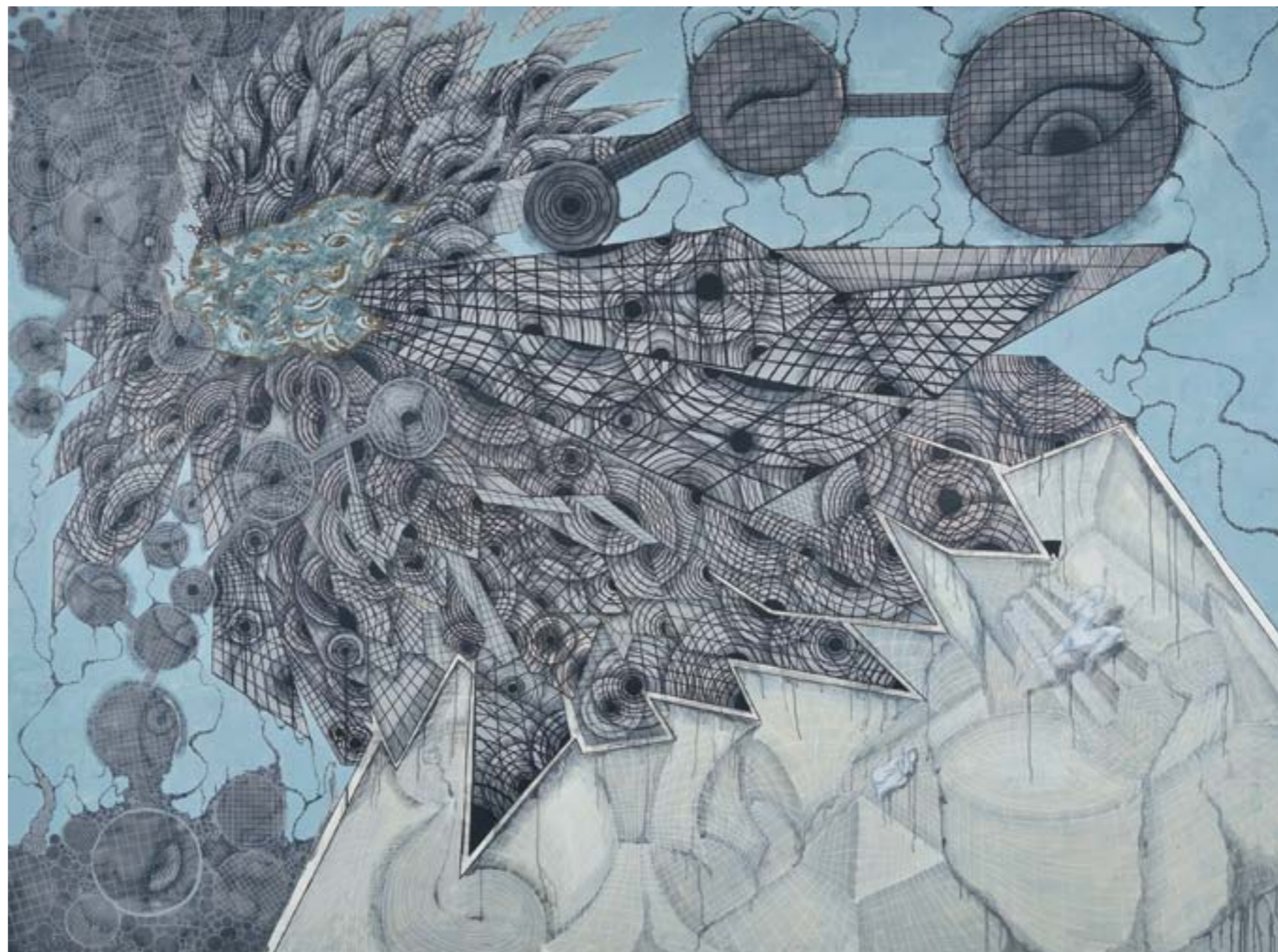
### 人の心の闇

Darkness of mind

最近、何の覚悟もなく悪事を働く人が増えたと感じる。そんなことを考えながらこの作品を描いた。例えばネットで誹謗中傷している人たちの書き込みを観察していると、驚くほど軽い考えで書き込みをしていることがよく分かる。誰かが必ずその書き込みを見て傷つき、不快な思いをするということをまるで想像していない。そして、それによって自分が「加害者」となり、罰せられる立場となることを理解していない

のである。もしもこの絵を通して、そんな加害者たちに何かを伝えられるとしたら一言だけ伝えたい。「自分の悪事を隠し通し、逃げおおせることはできない。必ず誰かが見ている。」と。

破壊的行動をとる加害者たちと、それに翻弄され逃げ惑う被害者たち、良くも悪くも見ているだけの傍観者たちの様子を表現した。



誹謗中傷する人たち  
People who slander  
油彩、ポスカ/キャンバス  
Oil and Posca markers on canvas  
194 × 259 cm

# 長 恵利佳

CHO, Erika

## そのものらしさに言及する

Self - reference

ある物、光景に備わっているものを観察し、それによって  
それ自身に言及する。



Silencer I・II  
インスタレーション / ヤスリ、リムーバー、カーテン、アクリル絵の具  
Installation / Sandpaper, remover, curtains, and acrylic paint  
サイズ可変 / Variable size



# 富江 亮

TOMIE, Ryo

## イメージと言語と認識

Image, language and perception

私たちというのは常に外国人、異邦人です。文化の激しい輸出入が荒く繰り返される時代に私たちはいます。匿名性と異邦性を帯びた会話や図像などが私たちの生活には紛れ込んでいて、これらのもつメッセージを受け取る暇さえなく、ただ膨大なイメージに打たれています。音声やグラフィックだけについてくるそのイメージには、いつしか匂いや触覚を刺激するものは失われ、受け取り側への一方的な情報の押しつけとなってしまっています。

しかし、今の私たちの感覚というのは、まさになだれ込んでくるそれらのイメージによって育まれているのです。私はこの感覚そのものをなんとか具現化し、それが絵画の形式を持っている事から生じる違和感を添えることで、現代の美的感覚を混乱させることを試んでいます。そこには日本人のアイデンティティが部分的に剥がれ落ちた景色が展開していきます。



ザ・シュールストア イン ジャパン  
The surreal store in Japan  
油彩、カーボン、トイレットペーパー、  
ホルダー / キャンバス  
Oil, carbon, toilet paper,  
paper holder on canvas  
サイズ可変 / Variable size

## 中島 瑠里

NAKAJIMA, Ruri

### 水族館の美しさを描くことについて

Drawing the beauty of the aquarium



ユートピア  
The utopia  
油彩 / キャンバス  
Oil on canvas  
130 × 194 cm

水族館とは雄大な海のミニチュアールである。海には人工では作ることの出来ない美しさがあるが、一方で人の命を奪う残酷な一面もある。人の力で管理することができない大きすぎる海を、小さく切り取り、自然界から隔離した小さな空間に凝縮したのが水族館だ。現実世界から遮断された水族館内の小さな海には、美しさだけが存在している。私たちはそのような擬似的な海を眺めて、その時間に陶醉するのである。

私は館内の海から、より小さく、美しい一瞬を切り取り、絵画に閉じ込めたい。濁った水の色、ことくれた魚が漂う様子、餌の残骸など、水槽として現実感がある要素は排除し、美しさだけを抽出して描く。空間的にも時間的にも小さく切り取った私の海は、水族館のミニチュアールと言えるだろう。私は水族館よりも、さらに時間を超越した絶対的な美しさを作り出すことを試みていきたい。



飛行船のように  
As an airship  
油彩 / キャンバス  
Oil on canvas  
130 × 162 cm

## 中村 詩人

NAKAMURA, Makito

### 記号論の今日的意義

Contemporary significance of semiotics

今世紀の美術は、形式的には多くの面でかつての美術に近づきましょう。それは寓意と暗喩を口実に、酩酊作用と価値ある体験の間を往復するようなものになるはずで。注意せねばならないのは、それらがいかに歴史主義へのアンチテーゼ（今日のそれらは単なる歴史主義になり果てています）とかけ離れて見えたとしても、基本的にはそれらの延長線上にあるということです。大多数の人々は彼らの隠れ蓑を認識することができず、その崇高さを無批判に受け入れるか、的外れな反論をすることで逆説的に疎外されてしまうか

のどちらかを選ぶしかありません。驚くべきことに、彼らの高解像度と迫真性に裏打ちされた快樂の技術こそが、この問題を本質的に打開するでしょう。彼らとその理想をもたらしてから、美術は一度たりとも人々のものになったことはありませんが、それが永遠に奪われかねないこうした局面にこそ、人々が真にそれを手にする可能性が出てきたといえるのです。表面的には、彼らと人々が求めるものは似通ってきています。問題は、欲望を内面にどのように向かわせるか、そこにだけ残っています。



大瀑布 / Waterfall  
ミクストメディア / Mixed media / 151 × 93 × 80 cm



水沫 / Splash  
ミクストメディア / Mixed media / 40 × 38 × 9 cm



## 新山 碧

NIIYAMA, Midori

### 「何かがいったりいなかったり、何か起きていたり起きていなかったり」

“Something is present or not, something happens or not.”

画面上に自分のイメージを再現を試みています。イメージは私自身の経験や記憶や空想など、私個人が持つ多くの情報から発生してきます。生活の中で何気なくどこかをふと見たり、色々な理由で記憶に残っている光景や色や形があったり、なにかの気配があるような気がしたりといったことです。また、人間として生活している共通点のもと、私以外の人が、私と似たようなものを見る、記憶する、考えることもあると思います。私個人の情報から出発したイメージは、私の中だけの特定の物や場所から離れ、誰でもどこかで見ることもあるかもしれないものとして画面に現れます。

生活の中ではふと何かがいるのを意識したり、しなかったり、何もいなかったりします。同じ場面に対して何かが起きていると感じたり、そうでなかったりします。実際の日常にも絵の中の日常にも「何かがいるかどうか、起きているかどうか」の解釈に不安定さが生まれることを興味深く感じながら制作をしています。

生活(午前2)  
Living (2:00 AM)  
油彩 / キャンバス  
Oil on canvas  
130.3 × 194 cm



## 二反田 彩

NITANDA, Aya

### 見えないことへの気づき

The awareness of things that can not be seen



笑み

Smile

ミクストメディア / 和紙、刺繍糸、アクリル絵の具、竹、のり

Mixed media, Japanese paper, embroidery thread, acrylic paints, bamboo and paste

50 × 184 × 257 cm

眼に見えているものがほんとうのものではなく、そこには大事なことが隠れているのかもしれない。私は、「私」という存在が成り立つまでに辿っている道のりを振り返り、アーカイブしたことを作品に起こしている。日々眼にするものの中には、些細なことだが大事だと思えることが多く隠れていて、少なからずそれは人それぞれ感じていると思う。それに気づくか気づかないかで世界は違って見えるのではないだろうか。些細だが大事なことを積み重ねて、今「私」になっ

ていると私は気づいた。それを美術として形に起こし振り返りを続けることで、自分にとっての自己の存在を再確認し、周囲の人に経験の中の大事なことを思い出してほしいと訴えかける。金木犀の香りを嗅ぐと思いがぶ風景のように、もしかしたら一個人の記憶と他人と記憶の中には、共通する部分があるのかもしれない。私の作品を見て、見たことがあるものや感じたことがあることを思い出してもらい、世界の違う見方を発見してほしい。



# 新夕 莉江

NITTA, Rie

## 存在

Presence



未来への走馬灯 / Phantasmagoria for the future  
 ミクストメディア / Mixed media / 500 × 250 × 250 cm

### [未来への走馬灯]

直径2mの万華鏡は6つの鏡面で出来ており、鑑賞者は内部に散りばめられた作者の過去を覗き込むことができる。写真を「作者の過去の記憶」として可視化することで、鑑賞者と記憶の共有を試みた。私の記憶により鑑賞者は自身の記憶を呼び起こし、唯一無二であるはずのそれが、いつしか他者の記憶へとすり替わる。これにより、可視化された記憶は単なる画像にしか過ぎなくなり、自身の存在と他者の存在の境界線が曖昧になってしまう。

### [絵画としての机 / 立体としての机]

絵画と立体の定義を考えた。同じ手法で作られた2点の作品は、それぞれ壁掛けと床置きで違った印象を与える。「絵画としての机」は、ある一点から見ると、平面的な机が画面から飛び出して見え、絵画としても立体としても成立する。それ以外の場所からは、いびつな机の絵画として見ることができる。「立体としての机」は、それと逆のことが言える。この作品は、鑑賞の位置や設置方法を変えることで、絵画と立体のどちらにも留まることはない。



(未来への走馬灯細部 / Detail of Phantasmagoria for the future)



左下 / Lower left  
 絵画としての机  
 A table as a painting  
 ミクストメディア  
 Mixed media  
 116 × 170 × 60 cm



右下 / Lower right  
 立体としての机  
 A table as an object  
 ミクストメディア  
 Mixed media  
 116 × 170 × 60 cm

## 長谷川 彩織

HASEGAWA, Saori

### 見ることについて

About being seen



迷子の風景—NO.26— / Landscape of lost child—NO.26—  
油彩 / キャンバス / Oil on canvas  
162 × 130 cm

私の身体は今、ここにある。それなのにどこかへ行って戻ってきたかのような感覚になることがある。目の前のものを見ていながらも、いつの間にか精神はどこか遠くに向かい始め、やがて目の前に広がる現実へと意識は舞い戻ってくる。

そんな精神がここにはないような状態になることの不思議。

私は行ったり来たりする精神の動きに着目し、精神と身体の狭間で起こる感覚を絵画表現を通じて探究することを試みる。



迷子の風景—NO.31— / Landscape of lost child—NO.31—  
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 227.3 × 181.8 cm

## 馬場 美桜子

BABA, Mioko

### ある死生観から生まれる絵画

Painting created by the view of life and death



Im/mortal  
油彩 / キャンバス  
Oil on canvas  
130 × 162 cm

生きものの、生と死の境目に興味がある。

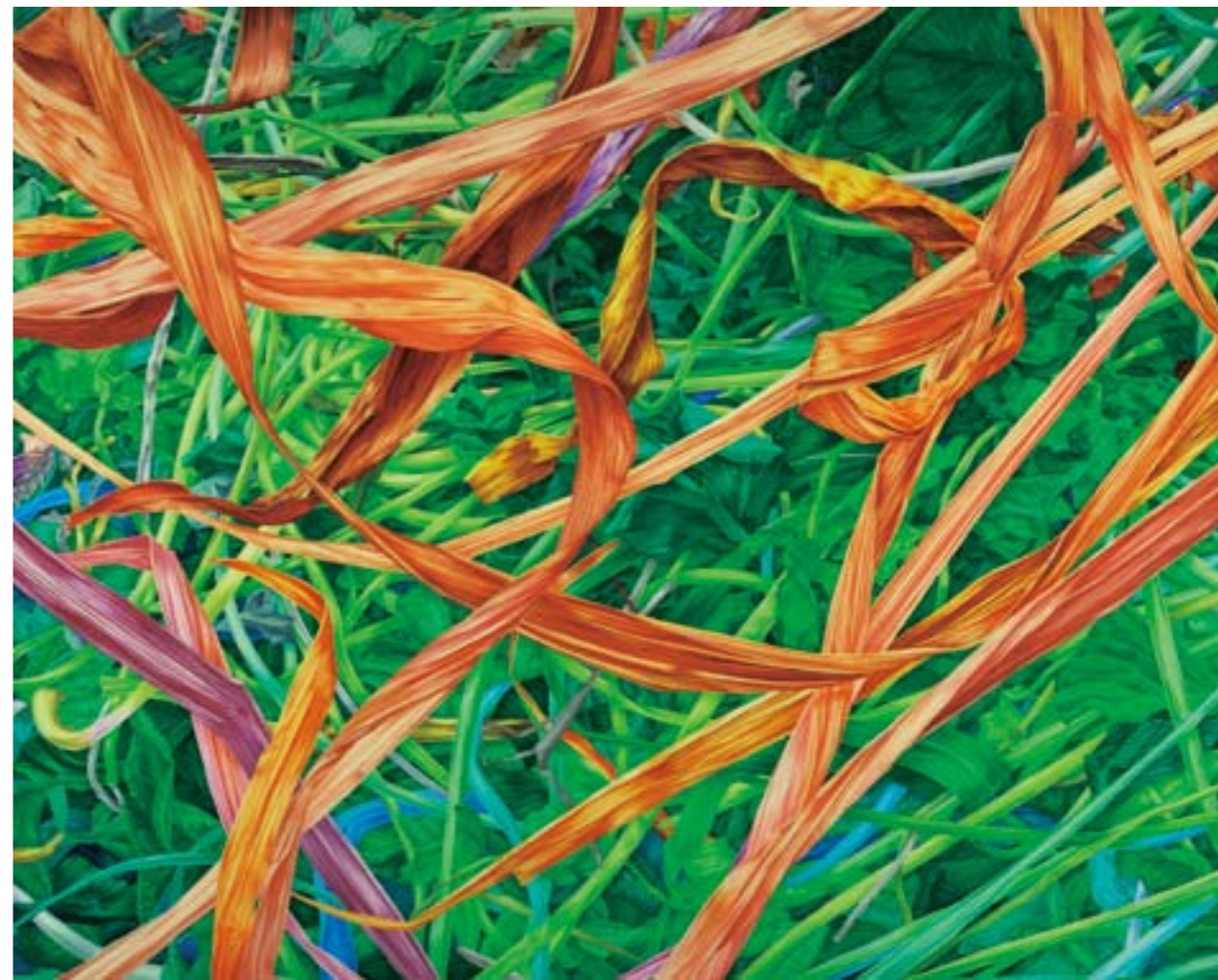
私は美術大学、大学院に在籍する中で、学部で2年次から現在まで一貫して「生と死の混在性」というテーマのもと、植物をモチーフにした絵画の制作をしてきた。

植物を見ていると、枯れた植物は一体いつから死んでいるのだろうと思う。誰かが死んだとするものも、私には時としてまだ生きているものに見えることがあるし、まるでまだ動きそうだと思うことがある。人それぞれが思う「死」とは、

必ずしも同じ瞬間のことではなく、自己と他者の中には異なる死生観が存在するのだと気が付いた。

絵画の中に描かれた植物は動かず、ただじっとしている。その時、それは生きているのか、死んでいるのか。生きもの、生きものだったもの、そこには生と死が混在している。

私は絵画によって、それらの生と死を同時に示したい。



Enigmatic  
油彩 / キャンバス  
Oil on canvas  
181.8 × 227.3 cm

## 韓廷旻

HAN, Jungmin

### インスタレーションを通じた時間の流れと自然表現研究

Installation art for the expression of nature and the passage of time

私は時間の流れによって現れる自然現象に着目して作品を制作している。自然が刻々と変化する様は、まるで人間の一生のようである。私はこの「変化する自然」から教訓を得て、それを美しい形にして表現する。自然の美を伝える方法は無限大に存在すると考えるが、私はその姿そのままを伝えるのではない。自然をベースとして、そこから得たインスピレーションを投影し新しい形へと変えていく。作品の材料には針金、糸、布、染料などを用いた。これらの材料を選ん

だ理由は、刻々と変化していく自然の様子を表現するのに布と糸が最も適していたからだ。また、偶然にできる色味や色のムラは作品にとって重要であり、糸と布は自ら染色した。この新しい形を見て、人々に幸せな気持ちになってもらいたい。さらには、これまで歩んできた人生を振り返るきっかけになればと私は願っている。自然は当たり前存在するものだが、そこに焦点をあて、何かを感じるきっかけを与えられれば幸いである。



時を刻む / Inscribe the time  
針金、糸、布、染料  
Metal wire, yarn, fabric and dyes / 350 × 500 × 300 cm / サイズ可変 / Variable size

# 松浦 実央

MATSUURA, Mio

## そこにあるもの

What is there

私はその場で偶然にも立ち会うことのできた、たとえば一度きりの線によって生まれた形象や布の皺、透過する光の様相などから、これまで出会ってきた奇跡的な瞬間を想起し、また私自身、忽然とこの世に生まれでた、不完全にして曖昧、不安定な存在であることを突きつけられる。だがそうした現実打ちのめされながらも、愚鈍になった五感とその揺さぶりによって再び感度を取り戻すことへのひそやかな歓喜に沸く自分がいる。名前のつけようがない、不安定で曖昧な

ものをつくろうと試みるのは、あらゆるものの似姿としてそれらを見ているからだ。

つくった人間の手を離れ、「無垢の存在」は不意に立ち現れる。それらが毅然として佇むのを前に、私を取り巻く諸々のものたちの尊さに気づかされると同時に、心身を拘束・抑圧する力の一切から解放されたような気持ちがあるのだ。



左作品細部 / Left detail



右作品細部 / Right detail



左 ◇  
アクリリック、鉛筆 / 布、角材、ホチキスの芯  
Acrylic / Cloth, rectangular lumber, staples  
340 × 120 cm

右 |||||  
アクリリック / 布、角材  
Acrylic / Cloth, rectangular lumber  
340 × 500 cm (サイズ可変)

# 松下 賢太

MATSUSHITA, Kenta

## 身体の行為

The action of my body



Boxed Me. —short ver.—  
ミクストメディア / Mixed media / サイズ可変 / Variable size

私は私を生きる私の身体に興味がある。私は作品を制作しているとき、何かに囚われているような感覚になる。私が作り出したい作品のイメージは、具体像に迫るたびに痩せていく。制作の手を動かしていると、ここにはただの私の手形や息づかいだけを遺したいと思えてくるからだ。思考で固めていたイメージから自身の行為だけをそこに置いておきたい。この私の行為は何を表現しているのだろうか。密教の師弟関係から地面に描き始めたといわれる曼荼羅の起

源を辿りながら、私はこの行為の応えを体感したいと思っている。私にとっての表現は、私個人と社会を繋ぐ一本の線の上に通過儀礼として門を構えているような気がしてならない。門を超えなければならないという脅迫すら感じる。だから私が遺した行為は時に暴力的なのかもしれない。私の中で大きく口を開けている門は、素っ裸の私を拒絶するかもしれない。ただ今はこの行為をただ垂れ流したいと思う。



Boxed Me. —short ver.— (閉じている状態)  
ミクストメディア / Mixed media / 80 × 80 × 80 cm  
パフォーマンス内容：60 分間、作者が箱の中へ入り内壁にドローイングをする。箱の内寸は作者の座高の高さ。



10STEPS  
ミクストメディア / Mixed media  
450 × 178.6 × 110 cm



## 松村 優花

MATSUMURA, Yuka

### 生命の活力

Vitality of life

日常の生活の積み重ねが私の作品制作の手がかりになる。日々同じように繰り返される事柄の中で、無意識に生まれる僅かな差異と揺らぎが自己を形作っていると考えている。そうした揺らぎを心身で受け止めることが絵を描きたいと駆り立てる気持ちに繋がっている。

一枚一枚は可憐な花びらであっても、一輪の花となって花卉の折り重なる姿は命のかよった力強さを感じさせる。このような姿は数多の種の生命のあり方、未来へと続いていく

営みを形態として映し出して体現するように感じられ、とても興味を惹かれる。折り重なる花卉を描く、私自身の身体も繰り返されるストロークに準じて揺らいでいく。不安定で有機的なそれらの集約が私の作品に強さを与えてくれるのである。揺らぎというと不安や弱さを連想させることが多々ある。しかし世の中に移ろわない事柄はないのである。その中で変化を受け入れ続けることが、生命のもつ強かさではないだろうか。私はそれを描いていきたい。



Bouquet

アクリル / パネル / Acrylic paint on panel

162 × 390 cm

## 村井 優香

MURAI, Yuka

### 意識を超える画面

偶発的な美しさの魅力

Pictures that transcend consciousness

The charm of accidental beauty

私は子どもの絵やアウトサイダーアートの作品に強い魅力を感じる。彼らの作品の共通した魅力の一つに「無意識に描かれたもの」がある。彼らの持つ手の動きの癖や、環境等よって思いがけずに画面に描かれてしまったもの。それらが彼らの作品の面白さや魅力に繋がっているのではないかと考えた。彼らは美術を学んでいないからこそ、美術の中にあるルールや常識を簡単に壊すことができる。私が作品を作ろうと考えるとき、彼らのように無意識に画面を構成す

ることは難しい。しかし、彼らの作品と同じような魅力を画面に作り出すことは不可能ではないと考えた。意識して作ったものを限界まで少なくして組み合わせることで、無意識で偶発的な画面を作ったのだ。これは、自分が意識的に作り上げることができる作品の限界を超えるための方法としても大きな力を発揮する。意識して作る画面の限界を超えるには、意識を除いた無意識の中に美しい画面を見出すことが必要だ。



Game

ミクストメディア

Mixed media

345 × 1,000 cm

# 吉田 麻未

YOSHIDA, Mami

## 制約のある制作によって生み出される形

Creating form with constrained works



不正確な8分の制作  
Inaccurate 8 minute work  
映像 / Video  
サイズ可変 / Variable size

自然界にある形や、人が自然と近い生活のなかで生み出す形には魅力を感じる。それらはそのものが周囲から受ける様々な影響、制約によってその多様な形が生み出されているのではないかと。そうだとすれば制作にも制約を設けることで、魅力ある形が作り出せるのではないかと。このように考えたことが、この制作研究のきっかけである。周囲からの影響、あらゆる関係の中で魅力的な形が作り出されるとして、人の感覚が形に及ぼす影響も同じように関係の一つと捉えて

よいのだろうか。感覚に対する疑問から、細かく定めたルールに従って制作することで、感覚を用いない制作を試みた。結果として、感覚を排除した制作は困難であるということがわかり、また感覚による判断の多くは無意識に、そして瞬間的に行われているということに気づく。感覚もまたあらゆる影響や関係のなかで構築されており、変化し続けるものである。新たな視点から制作に条件を与え、観察することが次の課題である。



左列 左側映像部分 / Left column : Left side video image stills

右列 右側映像部分 / Left column : Left side video image stills

## 渡部 未乃

WATABE, Mino

### 神秘的な風景

Mysterious landscape

自然が作り出した、偶発的な形が織り成す神秘を感じる場所をモチーフとして絵を描いている。モチーフとなる風景は実際に自分の眼で観た風景である。「まだ見たことのない新しい絵」を描くには、自分にしかない視点を見つけ出すことが何より重要だと考えているからだ。その風景を元に何枚もドローイングを重ねていくと、徐々に不必要な部分が削ぎ落とされシンプルな形となり、もののシルエットラインや構図の面白さが明確に伝わるようになる。

さらに、絵の中に存在しているモチーフはスケールが特定できないように描く。石なのか岩なのか、雑草なのか大きな木の幹なのか、水溜まりなのか大きな湖なのか、サイズが特定できないように描く。極小にも極大にも見える要素のみを描くことで、マイクロとマクロ、近景と遠景、具象と抽象、現実と空想、全ての中間地点に在るような絵画を目指している。



外海 / Open sea  
アクリル、油彩 / キャンバス / Acrylic and oil on canvas / 194 × 783 cm

# 浅野 拓也

ASANO, Takuya

## 仮説としての空間主義

Spazialismo as the hypothesis



自立する木枠 / Wood frame for self-reliance  
木枠、ニス、染料 / Wood frame, varnish and dye / 130 × 162 × 150 cm



Izele  
アクリル絵の具 / アルミ、塩化ビニールシート  
Acrylic on PVC sheeting aluminum frame  
162 × 130 cm



Burst again  
液体ゴム、染料 / アルミ、塩化ビニールシート  
Dye and lipid rubber on PVC sheeting aluminum frame  
162 × 130 cm